

二〇一三年度

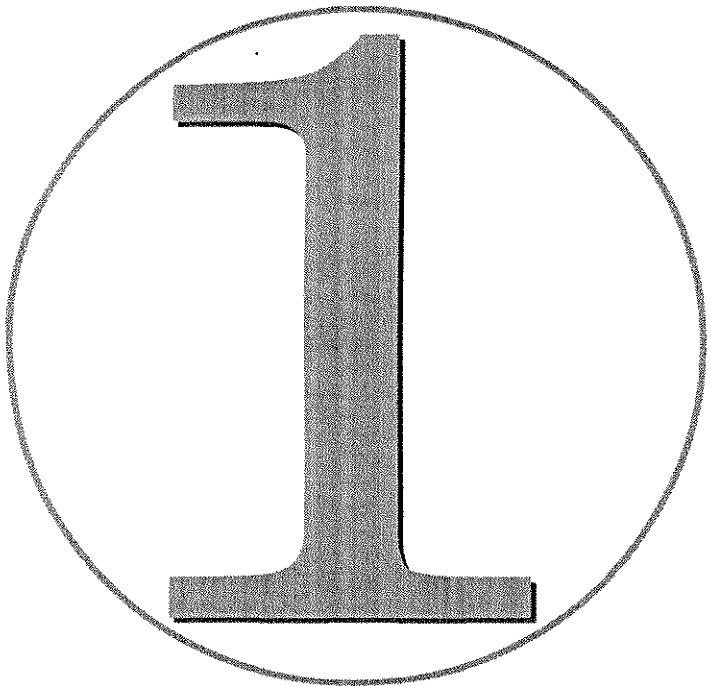
第一回入学試験問題

国語

時間
60分

「注意」

- 1、放送で指示があるまで、この冊子きょうしを開いてはいけません。
- 2、この冊子は21ページまであります。ページが足りなかったり、順序がおかしかったり、また印刷が不鮮明ふせんめいで読めない部分があったりした場合には、手をあげて監督かんとくの先生に申し出なさい。
- 3、問題についての質問は一切受け付けません。
- 4、下書きにはこの冊子の下書き欄らんや余白を使いなさい。
- 5、字数指定のある問題では、句読点やカッコなども字数に含みます。



聖光学院中学校

一、次の①～⑤の文の――線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 僕は、英語が得意な彼女と仲良くなることをセツボウしていた。
- ② 彼女はキグライが高そうに見え、僕のことなど相手にしてくれそうになかった。
- ③ 僕はどうしたら仲良くなれるか、あれこれとシアンした。
- ④ たまたま国際シンゼンを目的とする集まりがあったので、彼女を誘った。
- ⑤ 海外から来た人たちと会話を楽しんでいる彼女を見て、僕もフンキして英語の勉強にいそしんだ。

(1-1)

二、次の①～⑤の文の――線部には、衣服やその一部、または身につけるものなどを表す言葉が入ります。例にならって、その言葉をひらがなで答えなさい。

例
嘘ばかりつく友人とは を分かつことにした。
〈答〉たもと

- ① 生徒会長に就任したので、 を正して仕事をしようと思っている。
- ② Aさんと言えば、齒に を着せぬ物言いが持ち味だ。
- ③ 文化祭のホームページの作成は、コンピュータの得意な友人に を預けた。
- ④ 監督の になかう優秀な選手がたくさん集まった。
- ⑤ 一緒に遊びに行こうと誘ったのに、友達に にされて落ちこんだ。

(1-2)

三、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

誰もいないのに、電気ついている。

単なる誰かの消し忘れだったかもしれないし、何の意味もない偶然だったかもしれないけど、ぼくは足を止めた。部屋の中を振り返り、注意深く歩いていく。

大きな看板と看板の間の陰を覗き込む。ふみちゃんがそこにいた。青いエプロンドレス。レースのエプロンに顔をうずめて、体育座りの姿勢を取っていた。

「ふみちゃん！」

ぼくは声を上げた。

彼女がべたりと腰をつけた床は、埃っぽかった。スカートが汚れちゃうよ、ぼくはあわててふみちゃんに呼びかけた。

「何してるの？ 早く行こうよ。ふみちゃんの順番、もうすぐだよ」

流れるようなピアノの音の中で言ったぼくの声に、ふみちゃんは顔を上げなかった。黙ったまま、首を振る。嫌です、と意思表示をするように。

「おばさん、心配してるよ？ 具合が悪いの？」

ふみちゃんがまた、弱々しく首を振る。① ぼくは困ってしまった。下の階から聞こえるピアノが気持ちを焦らせる。このままじゃ、ふみちゃんの出番が来てしまう。間に合わなくなってしまう。

「ふみちゃん……」

「行かない」

かすれた声が、俯いた顔とエプロンの合間から洩れた。それを言ったと同時に、ふみちゃんは更に強く顔を膝に押しつける。ぼくは驚いて、改めて彼女を見下ろした。ふみちゃんが顔を上げたのは、次の瞬間だった。

「今日はもう、帰りたい。ふみは……」

どれくらい長い間同じ姿勢でいたのだろう。ふみちゃんのおでこに、エプロンのレースの跡がくつきりとついていた。眼鏡もずれてるし、顔も真っ赤だった。目が、泣き出しそうな色をしている。X ぼくを見つめ、唇をぎゅつと引き結んだ。こんなふみちゃんの顔を見るのは、初めてだった。みんなにどれだけ悪口言われても、遠足で一人きりでご飯を食べていても、ふみちゃんは一度だって泣いたことがなかった。

(1-3)

今だって、泣きはしないけど、ふみちゃんの両目はみるうちに強い感情の力によって歪んでいく。ふみちゃんをそうするものが悲しみなのか、怒りなのか。ぼくにはわからなかった。② あっけに取られて立ち尽くすぼくの前で、ふみちゃんはやがて、ためこんでいたものをとうとう吐き出すように、呟いた。

「あの子の後に……、ピアノ弾くの、やだ」

ピアノの演奏が、また終わった。ぼくの覚えているので正しければ、次の子はふみちゃんの二人前の演奏者。次の次が、ふみちゃん。そして一人休んだせいで、ふみちゃんの前に弾くのが、あの子。

ふみちゃんはぼくに話してしまったことを後悔するようにまた俯いた。顔が耳まで真っ赤になる。恥ずかしくてたまらないのだ、という風に見えた。そう見えたと同時に、ぼくは驚いて、それから不思議に思ってしまう。何がだろう？ ③ 何がそんなに恥ずかしいんだろう。

「ふみちゃん」

「もうやだ。もう、やだ」

さつきふみちゃんの先生が言っていたふみちゃんの前の演奏者は、ぼくも知っている子だ。隣のクラスの男子で、直接話したことはないけど、とてもおとなしい子。ピアノを習ってるらしいってことも知ってた。

男の子が習い事にピアノを選ぶのは珍しい。それって確にかっこいいけど、ふみちゃんが何を恥ずかしがっているのか、どうして彼の後の演奏が嫌なのかは、ぼくには理解不能だった。

「すごく、うまいの」

泣き出しそうな声が、ぼくに教えてくれる。

「あの子、すごくすごく、うまいの。ふみ、知ってる。あんなの、誰も勝てないよ」

「ふみちゃんより順番が早いってことは、ふみちゃんより簡単なヤツを弾くってことでしょ？」

「そうだよ。だけど、駄目。あの子は、簡単な曲でもうまいんだよ。ふみが、みんなにつきはぎだらけのボロボロだって、ばれちゃうよ。どんな難しい曲を弾いても、みんなにわかつちゃうよ」

つきはぎだらけのボロボロ。

ふみちゃんが使った言葉に、④ ぼくは射すくめられたようにその場を動けなくなった。言うなり、ふみちゃんはまた顔を覆ってしまう。本当にこの場から動くつもりがないのだとわかった。どうやら本気だ。

「そんなの……」

(1-4)

そんなのおかしい。ふみちゃんはボロボロなんかじゃない。思うけど、その時のぼくは完全にふみちゃんの剣幕に圧倒されてた。何より、いつも毅然として自信家なふみちゃんが、自分のことをそんな風に思っていることに驚いていた。

お母さんやおばさんと呼びに行っている時間がなかった。その子のピアノは、ふみちゃんが言う通りきつと上手なんだろう。けれどじっくりこなかった。ふみちゃんだって、頑張って練習してきたはずなのに。

ぼくは床に膝をつけ、ふみちゃんにそろそろと近づいた。

「ふみちゃんは、ピアノが上手だよ」

「だけど、ばれるよ」

返ってくる彼女の声は、弱々しくて小さかった。今にも崩れそうだった。ぼくの方に、もう顔を上げてくれなかった。

「難しい曲弾いても、あの子には勝てない」

聞こえてくるピアノのこの曲も、もうすぐきつと終わる。早くしないと、ふみちゃんの順番が飛ばされる。

「勝ちたいの？」

ぼくが尋ねたその時だった。足下のピアノ曲が、音を長く響かせて途切れた。ふみちゃんの腕が、ぴくんと震える。ぼくの声に対してそうだったのか、それとも演奏が終わったそのせいなのか。どちらかはわからなかった。演奏者に向け、ザザザ、と波の音のような拍手が起こるのが聞こえる。

ふみちゃんが微かに顔を上げた。ぼくを見ないで、目だけ覗かせる。泣いているわけではなさそうだったけど、充血して赤くなった目だった。

「勝てないことがわかってるの」

ぼつりと言ったふみちゃんの声は、ひどくかすれていた。負けず嫌いで、向かうところ敵なしの彼女の口からそんな弱気な発言が飛び出すなんて。

「だけど、難しい曲にすれば、勝てないけど、ふみも恥ずかしくないと考えた。あの子のすぐ後はチエちゃんが弾くし、そのチエちゃんの後だったら、みんな、お母さんもクラスのみんなも、あの子がすぐうまかったことをちよつとは忘れてくれるんじゃないかと思って。だけど……」

自分の膝を抱えるふみちゃんの手にぎゅつと強い力が込められた。そして言う。

「恥ずかしいよ。どうしよう、恥ずかしいよ」

(1-5)

その時だった。ザザザザ、さつきと同じような控えめな拍手。その気配が足の下から伝わってきた。ふみちゃんの一つ前の、あの子の順番。彼がライトを浴びて、礼をするところが想像できた。

「ふみちゃんだってうまいよ。だからもう……」

行かないと駄目だ。

そう言うて、腕を引こうとした瞬間——、ぼくは伸ばしかけた手を止め、声を失った。ポロン、下からピアノの音が聞こえたからだ。けれど、違う。A さつきまで聞こえていた音色とはまるで違う。

B ピン、と糸が張りつめたような、通りのよい音。

ぼくは⑤ 思わず床に顔を向けた。そこから透けて見えるわけもないのに、そうせずにはいられなかった。柔らかくて、優しい曲だった。確かに使われている音はそう多くないだろう。ふみちゃんの『エリーゼのために』の方がきつと長いし、C 指使いも難しいんだろうってことは想像できる。けれど、何なんだろう、これは。

力いっぱい弾いている雰囲気はまるでないのに、ものすごくよく聞こえる。さつきの子のピアノの方が、もつとずっと強い調子だったのに、今聞こえるこの演奏は、D 穏やかなのに段違いに張りのある音色をしている。演奏会場にあったグランドピアノがピカピカしていたことを思い出す。E あの子のピアノの黒い輝きと、この音が似て思えた。

ぼくには、ピアノのことなんて何もわからない。『猫ふんじやった』は『猫ふんじやった』だし、『エリーゼのために』は『エリーゼのために』だ。だけど、はつきりわかった。ふみちゃんの言う通り、これを弾いている子は多分、すごくピアノがうまい。

「バイエル」

ふみちゃんの声がして、⑥ ぼくははつと顔を上げる。悔しいような、泣き出しそうな顔のまま、ふみちゃんはまだ同じ姿勢でそこに座ったままだった。

「一番最初に勉強する、簡単なピアノの本なの。あの子が弾いているのは、その中の一つ」

何回か見かけたことのある隣のクラスのある男の子は、背が小さくてどっかぼんやりした目をしてる子だった。あの子が、これを弾いてるなんて嘘みたいだ。

「わかんない子もいるかもしれない、あの子もふみも同じぐらいだと思ってくれる人もいるかもしれない。だけど、知ってる。ふみはボロボロで、この子はピカピカの天才だよ」

何でもよくできるふみちゃんだけど、確かにピアノは勉強や習字に比べて彼女の専門ではないのだろう。けれど、ふみちゃんは、自分自身が天才じゃなくても、天才が誰か、それがどういいうものかを理解

(1-6)

できる秀才ではあるのだ。

ぼくの中の認識が間違ってたことに気づく。ぼくは、ふみちゃんは大人にほめられれば、それでいいんだと思ってた。クラスメートたちに何を言われても平気でいるのも、そのせいだと思ってた。だけど、多分、違うんだ。

ふみちゃんがクラスの他の子たちを許してるように見えること。それは多分、ふみちゃんがいる場所がそんなところになかった。クラスメートたちよりも、彼女をほめてくれる先生や大人たちよりももっとずっと大きな、目に見えないものがふみちゃんが立ち向かう相手。

だから、今日までずっと練習してきたその努力を手の中で握りつぶそうとしている。

聞こえるピアノは、同じメロディーを違う風に何度も何度も繰り返す曲だった。知らない曲のはずなのに、それでも耳が音を追いかけてしまう。

どうしようもなく、ぼくはやるせない気持ちになった。うまく言えないけど、この時のぼくは、ふみちゃんが本当に正しいと思つた。教科書に出てくるように正しい。ここまででいいやっていうあきらめのない、ただただまっすぐな姿勢。ふみちゃんはそれが曲げられないだけ。どうしようもないから、負けを認めて逃げようとしてる。

だけど、^⑦ぼくは嫌だった。わがままだけど、ふみちゃんに逃げてほしくなかった。

「だけど、行かないや駄目だ。今ならまだ間に合うよ」

教科書を見て発言したり、宿題を写したりするズルを軽蔑するふみちゃん。天才が誰かってことをわかつちやうふみちゃん。友達ができない、頭のいい、正しいふみちゃん。一人だつて平気なふみちゃんをぼくは尊敬していて、今日のこれは、そんな^⑧ぼくが初めてみる舞台裏のふみちゃんだった。正しいことをしようと、いつも一生懸命なんだ。

「ぼく、聞きたいよ。ふみちゃんのピアノが好きだし、ぼくは」

今はいいかもしれない。逃げて、胸がほつとするかもしれない。だけどふみちゃんは、今日ここで逃げたことを多分ずっと引きずって、何度も何度も思い出して苦しむだろう。他の子や、それにぼくだつたら、ごまかしながら忘れてしまふだろうけど、ふみちゃんは違う。きつとずっと覚えてる。

「ぼくは、ふみちゃんに、いつも堂々としてほしいんだ。そんな友達、ぼくにはふみちゃんしかないんだよ。ぼくはふみちゃんと仲がいいことが自慢なんだ」

友達だけど、ちよつと憧れだから。

それを聞いたふみちゃんの目に、不思議な光が浮かんだ。それまでずっと宙だけを睨んでいた目が

(1-7)

ゆつくりとぼくの顔を見る。

どうしてぼくが泣きそうになってるんだろう。頭の奥がぐらぐらする。ほつぺたが熱い。

「ねえ、ふみちゃん」

喉の奥が熱く震え出す。普段女の子と手をつなぐなんて、絶対にしちやいけない恥ずかしいことだと思つたのに、とても自然にぼくの手がふみちゃんの膝の上の手に触れた。ぼくの熱い手と反対に、冷たい手だった。これからピアノ弾くの、これじゃ大変だ。

自分自身が空気を吸い込む音を聞いたと思つた。ぼくは彼女の目を見つめ、そして呟いた。

「戻つて、みんなの前できちんとピアノを弾こう。そうじゃないと、この先一生、いつまでも思い出して嫌な思いをするよ」

それを告げた、その時だった。

ぼくの肩からふつと力が抜ける。どうやら緊張していたらしい。膝がかくんと力をなくして、ぼくは床にべたりとお尻をつけて座り込んだ。

ぼくの言葉を受けたふみちゃんは、とても静かだった。ただ黙って、ぼくを見つめ返している。^⑨ふいに大きく瞳が揺れて、泣き出しそうな顔をしてぼくから視線をそらす。そして尋ねた。

「本当？」

「え？」

かすれた声だった。目を合わせないまま、ふみちゃんの小さな声がもう一度する。

「ふみと仲がいいことが自慢だつて」

「そうだよ」

答えると、ふみちゃんは唇を引き結んだ。ピアノが、さっきまでとメロディーを変えている。もう、いつ終わってもおかしくないように思えた。

ふみちゃんが、すつくと立ち上がった。座り込んでいたぼくを見下ろし、そして頷いた。

「ありがとう」

言うなり、すごい速さで走り出した。逃げるためにそうしたわけではないことが、ぼくにはわかつた。ドレスのスカートがレースと一緒に揺れる、その後ろ姿を確認して、ぼくは、わあっと声を上げたい気持ちになった。

(辻村深月『ぼくらのメジャー Spoon』による)

※問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた。

(1-8)

問五 線部A～Eの中で、ふみちゃんの直前に演奏している男の子のピアノのうまさを表した表現としてあてはまらないものを、A～Eの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A さつきまで聞こえていた音色とはまるで違う
- B ピン、と糸が張りつめたような、通りのよい音
- C 指使いも難しいんだらうってことは想像できる
- D 穏やかなのに段違いに張りのある音色をしている
- E あのピアノの黒い輝きと、この音が似て思えた

問六 線部⑤「思わず床に顔を向けた」から——線部⑥「ぼくははっと顔を上げる」に至るまでの部分での「ぼく」の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 分かる人間にしか分からない、男の子の上手な演奏を聞きながら、いつしか夢の世界へと引き込まれてしまっている。
- イ ふみちゃんの弾く曲に比べれば素朴な印象を与える男の子の演奏に聞き入りながら、ふみちゃんの悔しさやつらさを思いやっている。
- ウ 穏やかながらも人の心に訴えかけてくる、男の子の演奏を耳にしながら、思わずふみちゃんよりも男の子の方を応援しそうになっている。
- エ 耳にするだけでその腕前のほどがわかる、男の子の演奏に心をとられ、自分の置かれている状況を一時忘れてしまっている。
- オ 耳をふさぐとしてもできないほどの、男の子の演奏の魅力に、ふみちゃんにも劣らぬほどの悔しさを覚えてしまっている。

(1-11)

問七 線部⑦に「ぼくは嫌だった。わがままだけど、ふみちゃんに逃げてほしくなかった」とありますが、それはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 恥をかくのが嫌だからと演奏を拒むふみちゃんは自分勝手に見え、「ぼく」を含めた応援する人たちの気持ちがわかっていないと思ったから。
- イ たかがピアノの演奏会にそこまで意地を張るふみちゃんの気持ちが理解できず、「ぼく」も意地を通してふみちゃんに演奏させたいと思ったから。
- ウ いくらふみちゃんの言うことが正しくても、ここで逃げることを許してしまったら、「ぼく」はそのことをこれから一生後悔することになるだろうと思ったから。
- エ ピアノを弾きたくないという気持ちは分かるが、「ぼく」はふみちゃんに、逃げたことで後悔し続けるような道を選ばず、いつも堂々としていてほしいと思ったから。
- オ 恥をかきたくないという気持ちも理解できる一方で、逃げて後悔するようなことになってほしくないという「ぼく」のやるせない気持ちを、ふみちゃんに伝えたいと思ったから。

問八 線部⑧に「ぼくが初めてみる舞台裏のふみちゃんだった」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 普段の自信に満ちあふれたふみちゃんの姿の裏にある、どんなことにもまっすぐにぶつかるあまり苦悩することもあるというもう一つの姿を、「ぼく」が知ってしまったということ。
- イ 決して弱音を吐いたりしない強いふみちゃんの姿の裏に隠された、恥ずかしがり屋で弱虫の、別のふみちゃんの姿が、今「ぼく」の目の前にあるということ。
- ウ 他人を天才だと認めることのできる謙虚なふみちゃんの姿の裏には、自分が一番でないと気が済まないプライドの高いふみちゃんが隠れていることに「ぼく」が気づいたということ。
- エ 何事にも一生懸命で、誇りに満ちたふみちゃんの姿の裏に隠された、未熟で我が強い一面も、「ぼく」にとっては新鮮で魅力的に映ったということ。
- オ 正義感が強い、クラスメートから嫌われても気にしないふみちゃんの姿の裏にある、初めてみるさびしがりやのふみちゃんの姿は、「ぼく」だけの秘密にしておこうということ。

(1-12)

問九——線部⑨に「ふいに大きく瞳が揺れて、泣き出しそうな顔をしてぼくから視線をそらす」

とありますが、このときのふみちゃんの心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分はいつも正しいと思ってきた気持ちを「ぼく」の言葉で突き崩され、悲しみの中からもう一度立ち直ろうとしている。

イ 「ぼく」の優しい言葉がきっかけとなって、隠していた自分の弱さを見せてしまい、恥ずかしさのあまり、目を合わすことができないでいる。

ウ どう見ても負けると思っていた男の子との勝負に、「ぼく」の支えがあれば勝てるかもしれないと希望を抱き始めている。

エ かたくなな気持ちがゆるみ、「ぼく」が伝えたことを信じたくなってきたものの、まだ確信が持てず、どきどきしながら確認しようとしている。

オ どうしていいかますます分からなくなり、あふれそうな涙をこらえながら「ぼく」の言葉の真意を図ろうとしている。

問十——線部Xに「ぼくを見つめ、唇をぎゅつと引き結んだ」、線部Yに「ふみちゃんは唇を引き結んだ」とありますが、このときのふみちゃんはそれぞれのどのような気持ちですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Xではピアノを弾いて恥をかきたくないと思い込んでいるのに対し、Yでは「ぼく」にさとされて弾かないことの方が恥ずかしいことなのだと理解している。

イ Xではピアノを弾きたくない理由を言うまいと心を閉ざしているのに対し、Yでは「ぼく」の優しい言葉に感動し、すべて打ち明けてもいいと心を開いている。

ウ Xではどうしてもピアノを弾きたくないと思っているのに対し、Yでは「ぼく」のやりとりの中で自分は一人ではないと勇気づけられ、逃げずにピアノを弾こうと決心している。

エ Xでは今の状況が苦しく泣き出したい気持ちをこらえているのに対し、Yでは男の子の後にピアノを弾く覚悟を決めたので「ぼく」の前では涙を見せないように耐えている。

オ Xでは絶対にピアノは弾かずに家に帰ると決意しているのに対し、Yでは「ぼく」に励まされてこのまま残って男の子に勝とうと決意している。

(このページは空白です。)

四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

最近の世の中には、理不尽なことがはびこっている。日々、ニュースで流されている政治や経済の表舞台のみならず、私たちの生活の場という、一人ひとりの個人的な場でも、道理にもとることが当たり前のように行われている。

それに対しては、多くの人たちが腹立たしく思っているが、実際に効果のあることは何一つできないのが実情である。ただ苦々しい思いを胸に抱いて我慢している。高度に情報化が進んでいるので、自分の意見や考え方を発信する術はあるのだが、当事者が真摯に対応してくれることは非常に稀だ。まさに「X」とか、「Y」とかいう結果にしかない。

もちろん、明らかに法律上の罪になることであれば、関係する当局も取り上げてくれる。だが、法に対する違反があつたとしても、罰則がなかったり、実際には適用されることのない罰則であつたりするときは、結局は何らの処置もなされない。そうすると、悪の横行が絶たれることはない。それを咎めたりすれば、逆に言い掛かりをつけられる始末だ。

たとえば、歩道を疾走する自転車である。明らかに法律違反であり、歩行者の身体に危害を加える可能性が高いにもかかわらず、野放しになっている。のんびりと散歩することはおろか、大手を振って歩くこともできない。

私自身も、最初はその都度腹を立てていたが、それでは精神衛生上よくないので、最近は諦めて①自衛に専念することになっている。都会というジャングルには、虎や狼のように振る舞う無法者が多くいる。それから身を守るために、前後左右に全神経を張りめぐらせながら歩く。それは、この世で生き残るためには必要不可欠な心構えである、と自分自身に言い聞かせている。

どういうわけで、このような世の中、すなわち身勝手な人が多い社会になっているのであろうか。道理に適ったことが行われないのは、無理が通用するからである。「無理が通れば道理引込む」という諺どおりになっている。

無理を平気で強行しようとするのは、②幼児性の特徴である。幼児には世の中の常識がわかっていないので、その場における自分の欲のみに従って行動しようとする。その場の状況や周囲の人たちの意などは無視して、我がまま放題に振る舞おうとする。ないものねだりをしたり、だだをこねたりする場合もある。社会性が欠如しているうえに、分別という思考力や判断力がまだないので、人格の形成が

(1-15)

十分行われていないのだ。

現在の大人には、このような幼児性からの脱却ができていない人が多いのではないだろうか。生まれてから二十年を経過すれば、自動的に「成人」といわれ、一人の例外もなく、大人として扱われる。心身が十分に成長しているかどうかについての点検もなされないままに、大人の仲間入りをするのである。

その点に関する責任については、教育をはじめとする人間社会の仕組みにあるのは確かだが、それだけではなく、本人自身の自覚にもあることを悟らなくてはならない。この世界に生まれてきて、現在だけではなく将来にもわたって、自分の家族や近頃のコミュニティだけではなく、広く人間社会全体の中でつつがなく生きていこうと思ったら、ほかの人たちの気持ちや考え方を斟酌する必要のあることがわかるはずだ。

自分の幸せを手に入れるための最も安全な道は、ほかの人たちの幸せについても考えを及ぼしていくところに見出すことができる。そのような考え方を身につけたうえで、その枠からはみ出さないようにして自分自身の中にあるあらゆる欲の実現を図っていくのが、名実共に大人となるために必要不可欠の条件である。

仕事の間であれ個人的な場であれ、日々の自分の言動について、できるだけ頻繁に反省してみる。幼児のように、社会性を無視して自分勝手なことをしている部分があるのではないか。自分のエゴを丸出しにして、大人げないことをしているのではないか。

人を傷つけるようなことをしたり、* 響きを買うようなことをいつたりしてはいないか。世の道理に反するような考え方を強行しようとしたことはないか。

また、自分や周囲の人たちだけではなく、広く人類全体についても、多少なりとも時々考えているか。③現時点だけではなく、将来についても考えたうえで行動しているか。

つまり、一人前の大人として毎日を生きているかどうかである。冷静になって、客観的に考えて、半人前でしかなかったら、早く幼児期を克服することを考えなくてはならない。

この世に生まれた以上は、この世で何とかして生きていかなくてはならない。そのためには、この世の仕組みやルールを知る必要がある。その知識の習得については、親や学校の先生をはじめとする大人たちが、教育やしつけというかたちで手助けをしてくれる。

その仕組みやルールに対しては、できるだけ忠実に従っていく。さもないと、生き残っていくのが難

(1-16)

しくなる。適者生存の論理である。大人になり年功を積むにつれて、自分の環境についても、どうしても耐えられなかったり疑問に思ったりする部分が見えてくる。そこで、そこから逃れるとか、どこかを修正するとかの手段を考えるようになる。

だが、それを実行する前にしなくてはならないことがある。個人としての自分自身を知ることだ。自分の性格について客観的な分析をしたうえで、自分の得意な点と不得意な点をきちんと見極める。その点については、④ 自分の思い込みだけに従うのは危険だ。周囲にいる人たちの見方や意見を参考にすると、

自分をもよく知っているのは自分ではない。人は自分がいかにばんかいい。したがって、どうしてもひいき目で見える結果になる。自分の悪い点や 不得手なところは認めたくない気持ちがあるので、不問に付する傾向がある。逆に、ちよつとでもできることがあれば、つい過大評価をする。そこで、ほかの人に客観的に見てもらったうえで、忌憚のない意見をいつてもらう必要があるのだ。

また、自分の生命力の根源となっているいろいろな欲に対しても、虚心坦懐に向き合って知っておく。食欲、財欲、名誉欲、睡眠欲、それに知識欲と、さまざまな欲の塊が自分の生身の正体である。それぞれの欲の強度については、人によって異なっている。その違いが、人の個性となつて現れている。自分の欲に対して「忠実に」従つて生きている人もいるが、欲をそのまま表に出すことはない。どこかで適宜に調節している。その調節を、常に社会を意識しながら、時と場合にに応じて上手にできるようにすれば、一人前として立派に通用する人となる。

(山崎武也『凜とした人、卑しい人』による)

※問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた。

(注) *1 真摯に……真剣に。

*2 斟酌する……思いやる。

*3 輦轡を買う……周囲の人に不快感を持たれる。

*4 虚

(1-17)

問一 X・Y にあてはまることわざとして、最もふさわしいものを、次のア～キの中から二つ選び、記号で答えなさい。なお、解答の順序は問いません。

ア 青菜に塩

イ のれんに腕押し

ウ 猿も木から落ちる

エ 犬も歩けば棒にあたる

オ 出る杭は打たれる

カ 河童の川流れ

キ 糠に釘

問二 線部A「不得手」、B「忌憚のない」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、あとのア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「不得手」

ア 彼にはあやまちをごまかそうとする、不得手なところがある。

イ 不得手なことに、約束を破ったことのない彼が来なかった。

ウ 人を説得するのは不得手なので、友人に頼んでしまった。

エ 先輩を軽んじるような、不得手なことはやめた方がいい。

オ 弟はいたずら好きで、いつも不得手なことばかりする。

B「忌憚のない」

ア 上司に遠慮して忌憚のない意見しか言えなかった。

イ 今後の方針について、忌憚のない意見を述べてほしい。

ウ 忌憚のない意見ばかりが出たので、会議は無事に終了した。

エ 常に控えめな彼なら、忌憚のない意見を言ってくれるはずだ。

オ 忌憚のない意見によって従来と変わらない予算案が成立した。

(1-18)

問三——線部①に「自衛に専念する」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 歩道を我が物顔に走る自転車に遭遇しても、腹を立てるのではなく、けがをしても命に関わるようなことにならないよう、注意しながら散歩したり歩いたりするということ。

イ 法律上の罪に相当するようなことを見つけても、自ら咎めたりせず、関係する当局が適切な処置をしてくれるまで、全神経を使つて自分の身を守ることに集中するということ。

ウ 法律や道理に反するようなことから害を受けても感情的にならず、高度に進化した情報化社会を利用して、自分の意見や考え方を真剣(しんけん)に当事者に伝えていくということ。

工理^{りふじん}不尽なことに遭遇してから腹を立てたりいらしたりするのではなく、早めに気づくために自分の周囲に気を配り、被害^{ひがい}を未然に防ぐようにすること。

オ　虎とらや狼おおかみのように振ふる舞まい、法律を無視するような人が多い都会にあつても、最後まで生き残ることができるよう、体力をつけ、護身術を学んでいるということ。

問四 ――線部②に「幼児性の特徴」とありますが、本文中に述べられたものとしてあてはまらないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どう見ても実現不可能な望みを、いつまでも言い立てる。

イ 自分では判断することができず、すぐに誰かだれに頼ろうとする。たよ

自分の願いがかなわないと知ると、文句をつけて納得なっとくしない。

工 他人の気持ちや考えなどは一切いっさい気にせず、したいように振る舞う。

自分が何かしたいと思った時に、その気持ちを何よりも優先させる。

問五 ——線部③に「現時点だけではなく、将来についても考えたうえで行動しているか」とありますが、このように考えなくてはならないのはどうしてですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現在においては、社会のルールにも合っている常識的な行動でも、時代が変わることで、人の迷惑になるということも起こりうるから。

イ 物事の見方や考え方は時代に應じて変わっていくものなので、将来のことを考えないとすぐに時代遅れおくれの人間になってしまうから。

ウ　子供が大人になるのはあつという間のことなので、今のうちから大人になったときのことを考えておかないと間に合わないから。

工年を取れば幼児と同じように、ないものねだりをしたり、だだをこねたりすることが増えてきてしまうものだから。

才 現在の自分の行動が、将来の自分や、次の世代の人々に何らかの影響を及ぼすというのありうることだから。

問六——線部④に「自分の思い込みだけに従うのは危険だ」とありますが、それはなぜですか。三十字以内でわかりやすく説明しなさい。

【下書き欄】らん——必要ならば使いなさい。

30

20

問七 筆者は、「欲」についてどのように考えていますか。『欲』は人間にとつて」に続く形で、八十
字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

「欲」は人間にとって

